

教科名	数 学 科		科 目 名	数 学		
対象学年	中学1年		コース・選択	—		
単位数	4単位		教科書 (出版社)	新しい数学1 (東京書籍) 新しい数学2 (東京書籍)		
使用教材	体系数学1 代数編 体系数学1 幾何編 体系問題集 数学1 代数編・幾何編					
学習のねらい	(1) 数を正の数と負の数まで拡張し、数の概念についての理解を深める。また、文字を用いることの意義および方程式の意味を理解するとともに、数量などの関係や法則を一般的かつ簡潔に表現し、処理できるようにする。 (2) 具体的な事象を調べることを通して、比例、反比例の見方や考え方を深めるとともに、数量の関係を表現し、考察する基礎を培う。 (3) 平面図形や空間図形についての観察、操作や実験を通して、図形に対する直感的な見方や考え方を深めるとともに、論理的に考察する基礎を培う。 (4) 文字を用いた式について、目的に応じて計算したり変形したりする能力を伸ばすとともに、連立二元一次方程式について理解し、それを用いる能力を養う。					
学習内容と流れ	学期・月等	単 元		学期・月等	単 元	
	4月	体系数学1 代数編 第1章 正の数・負の数 1. 正の数と負の数 2. 加法と減法		11月	4. 比例, 反比例の利用 体系数学1 幾何編 第1章 平面図形 1. 平面図形の基礎 2. 対称な図形 3. 図形の移動	
	5月	3. 乗法と除法 4. 四則の混じった計算 *			12月	4. 作図 * 5. 面積と長さ
	6月	第2章 式の計算 1. 文字式		1月		(計算力テスト) □ 第2章 空間図形 1. いろいろな立体 2. 空間における平面と直線 3. 立体のいろいろな見方 4. 立体の表面積と体積
	7月	4. 文字式の利用 * 第3章 方程式 1. 方程式とその解 2. 1次方程式の解き方 (計算力テスト)			2月	体系数学1 代数編 第6章 資料の整理と活用 1. 資料の整理 2. 代表値と散らばり 3. 近似値と誤差 *
	9月	3. 1次方程式の利用 第4章 不等式 1. 不等式の性質 (不等式の解き方まで) 第5章 1次関数 1. 変化と関数		3月		第3章 方程式 4. 連立方程式 5. 連立方程式の利用
	10月	2. 比例とそのグラフ 3. 反比例とそのグラフ *			□ — 基礎学力テスト * — 定期テストの目安	

教科名	数 学 科	科 目 名	数 学			
対象学年	中学2年	コース・選択	—			
単位数	4単位	教科書 (出版社)	新しい数学2 (東京書籍) 新しい数学3 (東京書籍)			
使用教材	精解 中学数学 代数編 上・下 精解 中学数学 幾何編 上・下 精解 中学数学問題集 代数編・幾何編					
学習の ねらい	(1) 具体的な事象を調べることを通して、一次関数について理解するとともに、関数関係を見出し表現し考察する能力を養う。また、具体的な事象についての観察や実験を通して、確率の考え方の基礎を培う。 (2) 基本的な平面図形の性質について、観察・操作や実験を通して理解を深めるとともに、図形の性質の考察における数学的な推論の意義と方法を理解し、推論の過程を的確に表現する能力を養う。 (3) 数の平方根について理解し、数の概念についての理解を一層深める。また、目的に応じて計算したり式を変形したりする能力を一層伸ばす。					
学 習 内 容 と 流 れ	学期・ 月等	単 元	学期・ 月等	単 元		
	4月	精解 中学数学 代数編 上 第3章 方程式 3. いろいろな連立方程式 4. 連立方程式の応用	□	11月	4. 平行線と面積 精解 中学数学 幾何編 下 第8章 確率 1. 場合の数	
	5月	第5章 関数 2. 1次関数	*	12月	2. 確率 演習問題	*
	6月	3. 1次関数と方程式 精解 中学数学 幾何編上 第3章 図形の調べ方 1. 平行線と角	*	1月	(計算力テスト) □ 精解 中学数学 代数編 下 第6章 展開・因数分解 1. 整数の性質 2. 多項式の計算	
	7月	2. 多角形の内角と外角 3. 図形と証明 (計算力テスト)		2月	3. 因数分解 第7章 平方根 1. 平方根 2. 根号を含む式の計算	*
	9月	4. 図形の合同 第4章 三角形と四角形 1. 二等辺三角形、直角三角形	□	3月	演習問題	
	10月	2. 外心と内心 3. 平行四辺形	*		□ — 学力テスト * — 定期テストの目安	

教科名	数 学 科		科 目 名	数 学		
対象学年	中学3年		コース・選択	—		
単位数	4単位		教科書 (出版社)	新しい数学3 (東京書籍) 高校 数学I (啓林館)		
使用教材	精解 中学数学 代数編 上・下 “ “ 幾何編 上・下 “ “ 問題集 代数編・幾何編 (高校) アドバンス 数I+A					
学習のねらい	(1) 2次方程式について理解し、式を能率的に活用できるようにする。 (2) 具体的な事象を調べることを通して、関数 $y = ax^2$ について理解するとともに、関数関係を見出し表現し考察する能力を伸ばす。 (3) 図形の相似や三平方の定理について、観察、操作や実験を通して理解し、それらを図形の性質の考察や計力に用いる能力を伸ばすとともに、図形について見通しを持って論理的に考察し表現する能力を伸ばす (4) 高校1年生の教科書で、数の概念についての理解を一層深める。また、目的に応じて計算したり変形したりする能力を一層伸ばす。					
学習内容と流れ	学期・月等	単 元		学期・月等	単 元	
	4月	精解 中学数学 代数編 下 第8章 2次方程式 1. 2次方程式の解き方 2. 2次方程式の応用	□	11月	第7章 三平方の定理 1. 三平方の定理 2. 三平方の定理と平面図形	
	5月	第9章 2次関数 1. 2次関数 2. 放物線と直線	*	12月	3. 三平方の定理と空間図形	*
	6月	3. いろいろな関数 精解 中学数学 幾何編 下 第5章 相似な図形 1. 相似な図形		1月	第8章 資料の活用 (計算力テスト) 2. 標本調査 (プリントのみで指導)	□
	7月	2. 平行線と線分の比 3. 相似と計量 (計算力テスト)	*	2月	高校 数学I 1章 数と式 1. 整式 2. 実数	
	9月	補充 メネラウスの定理 チェバの定理 第6章 円 1. 円の基本 2. 円周角	□	3月	3. 方程式と不等式 補充 (演習問題)	*
	10月	3. 円に内接する四角形 4. 接線と弦のつくる角	*		□ — 学力テスト * — 定期テストの目安	

教科名	数 学 科	科 目 名	数 学 I	
対象学年	高校1年	コース・選択	必 修	
単位数	3単位	教科書 (出版社)	数学I (啓林館) 数学II 改訂版 (啓林館)	
使用教材	アドバンス数学I + A (啓林館) アドバンスプラス数学II + B (啓林館)			
学習の ねらい	数と式, 図形と計量, 2次関数, データの分析, いろいろな式について, 基礎的な知識の習得と技能の習熟を図り, 事象を数学的に考察する能力を培う。また, 数学のよさを認識できるようにするとともに, それらを活用できる態度を育てる。			
学 習 内 容 と 流 れ	学期・ 月等	単 元	ね ら い	留 意 点
	4月	数学 I 第1章 数と式 3. 方程式と不等式	不等式の解の意味や不等式の性質について理解し, 1次不等式の解を求めること。また, 2次方程式を解けるようにすること。	中学での学習内容の理解度に配慮する。 方程式や不等式は, 高校数学の基礎となる計算であるので丁寧に指導する。
	5月	4. 集合と命題	集合と命題に関する基本的な概念を理解すること。	
	6月	第2章 2次関数 1. 関数とグラフ 2. 2次関数の最大・最小	2次関数とそのグラフについて理解すること。 2次関数の値の変化について, グラフを用いて考察すること。	平方完成の手順を, 確実に理解できるようにする。 関数のグラフとその最大値, 最小値の関係について理解できるようにする。
	7月	3. 2次関数と方程式・不等式	2次不等式の解を2次関数のグラフを用いて求めること。	方程式や不等式とグラフの関係について理解できるようにする。
	9月	第3章 図形と計量 1. 鋭角の三角比	鋭角の三角比の意味と相互関係について理解すること。	三角比の意味を言葉で説明できるようにする。
	10月	2. 鈍角の三角比	三角比を鈍角まで拡張する意義を理解し, 鈍角の三角比の値を求めること。	三角比の相互関係の公式は, 丸暗記せず意味を理解して定義より導くことができるように指導する。
	11月	3. 正弦定理と余弦定理	正弦定理や余弦定理について理解し, それらを用いて三角形の辺の長さや角の大きさを求めること。	正弦定理や余弦定理などの公式を導くのは容易ではない。公式を使って問題を解くことに慣れてから, 余力のある生徒はそれらを導くことができるようにする。
	12月	4. 図形の計量	三角比を平面図形や空間図形の計量に活用すること。	

	学期・月等	単 元	ね ら い	留 意 点
学 習 内 容 と 流 れ	12月	第4章 データの分析 1. データの散らばり 2. データの相関	四分位数, 分散および標準偏差など各代表値や箱ひげ図の意味について理解し, それらを用いてデータの傾向を読み取り説明すること。 散布図や相関係数の意味を理解し, それらを用いて2つのデータの相関を把握し説明すること。	これまでの単元とは独立した単元であり, 新たに憶える言葉の定義も多い。問題を解きながら意味を理解できるように指導する。
	1月	数学Ⅱ 第1章 いろいろな式 1. 整式の乗法・除法と分数式	3次の乗法公式および因数分解の公式について理解すること。また, 整式の除法や分数式の四則演算について理解すること。	整式の乗法・除法と分数式は, 基礎的な計算方法を扱う単元であるので丁寧に指導する。
	2月	2. 式と証明	等式や不等式が成り立つことを, それらの基本的な性質や実数の性質などを用いて証明すること。	
	3月	3. 高次方程式	数を複素数まで拡張する意義を理解し, 複素数の四則計算をすること。また, 2次方程式の解の種類の判別および解と係数の関係について理解すること。	扱う数の範囲を実数から複素数に拡張することの意味を2次方程式の解で理解させ, ベン図などを用いて理解を深めさせる。2次方程式の解の公式や判別式は, 実数の範囲で扱ったことがある内容であるが, 定着していない生徒がいる場合は復習しながら進める。
学習の留意点・評価など		<ul style="list-style-type: none"> ・定期試験に加え, 課題テスト, 冬休み明けのテスト, 小テストなどを評価に加味する。 ・学習意欲, 態度および提出物を評価に加味する。 		
備 考		<p><表現> 展開・因数分解・平方完成などの基礎計算を定着させ, 2次関数や三角比にまつわる基礎問題が解けるようにさせる。また, 答えにたどり着くだけでなく, 途中計算を他人が見て分かるように記述力をつけさせる。</p> <p><協働> 計算問題, 文章問題, 図形問題, あらゆる分野の問題を解くにあたり, 他者と学習内容を共有できるように促す。またペアワークやグループワークを通じて, お互いに理解できていないところを共有したり, 教え合ったりする姿勢を促す。</p> <p><科学的思考> 中学数学とは異なり, 抽象概念への理解や論理的思考を多く必要とする。数学Ⅰの範囲を学習する中で, 答えを求めるだけの姿勢から上記を含む数学的思考ができるように, 授業内で考える時間を多く持つように努める。また思考作業を通じて, 考える力を養う。</p>		

教科名	数 学 科	科 目 名	数 学 A	
対象学年	高校 1 年	コース・選択	必 修	
単位数	2 単位	教 科 書 (出版社)	数A 改訂版 (啓林館)	
使用教材	アドバンス数学 I + A (啓林館)			
学習の ねらい	場合の数と確率, 整数の性質または図形の性質について理解させ, 基礎的な知識の習得と技能の習熟を図り, 事象を数学的に考察する能力を養い, 数学のよさを認識できるようにするとともに, それらを活用する態度を育てる。			
学 習 内 容 と 流 れ	学期・ 月等	単 元	ね ら い	留 意 点
	4 月	序章 集合	集合と命題に関する基本的な概念を理解し, それを事象の考察に活用すること。	集合に関する用語・記号の $a \in A$, $A \cap B$, $A \subset B$ などを扱う。これらを理解させるため, 具体例を用いる。
		第 1 章 場合の数と確率		
	5 月	1. 場合の数	集合の要素の個数に関する基本的な関係や和の法則, 積の法則について理解すること。	もれなく重複なく数え上げるための, 基礎的な知識と技能を身に着けることに重点を置く。
		2. 順列・組合せ	具体的な事象の考察を通して順列組合せの意味について理解し, それらの総数を求めること。	単に公式を形式的に使うのではなく, 意味を理解することに重点を置く。また, 順列と組合せの混同に留意し, 樹形図などを用いて丁寧に指導する。
		3. 確率とその基本性質	確率の意味や基本的な法則についての理解を深め, それらを用いて事象の確率を求めること。また, 確率を事象の考察に活用すること。	確率の知識を既成概念として与えるのではなく, ある事象が起こる確からしさを数量的に求める方法を考えることに重点を置く。
	7 月	4. いろいろな確率	独立な試行, 条件付き確率の意味を理解し, それぞれの確率を求めること。また, それらの事象の考察に活用すること。	独立な試行の確率は, 条件付き確率につながる内容であるので, そのような見直しをもって指導するようにする。条件付き確率は, 確率を求める場面が容易に理解できる簡単な場面について確率を求める。

学期・月等	単元	ねらい	留意点	
9月	第2章 整数の性質			
	1. 約数と倍数	素因数分解を用いた公約数や公倍数の求め方を理解し、整数に関連した事象を論理的に考察し表現すること。	『数の集合と四則』は中学校で扱っている。	
	10月	2. 互除法と不定方程式	整数の除法の性質に基づいてユークリッドの互除法の仕組みを理解し、それを用いて二つの整数の最大公約数を求めること。また、二元一次不定方程式の解の意味について理解し、簡単な場合についてその整数解を求めること。	具体例を通して、その手順の持つ意味を理解させることに重点を置き、単なる計算練習に陥らないよう留意する。
	11月	3. 整数の性質の活用	二進法などの仕組みや分数が有限小数または循環小数で表される仕組みを理解し、整数の性質を事象の考察に活用すること。	十進法の表記法を見直し、 n 進法の仕組みを考えさせ、数の表記法についての理解を深める。
	12月	第3章 図形の性質		
12月	1. 三角形の性質	三角形に関する基本的な性質について、それらが成り立つことを証明すること。	中学校では、平行線や角の性質、三角形の合同条件、三角形の相似条件、三平方の定理を扱っている。	
	1月	2. 円の性質	円に関する基本的な性質について、それらが成り立つことを証明すること。	中学校では、円の半径と接線の関係、円周角と中心角の関係を扱っている。
	2月	3. 作図	基本的な図形の性質などをいろいろな図形の作図に活用すること。	中学校では、第1学年で角の二等分線、線分の垂直二等分線、垂線、円の接線などの作図を扱っている。
		4. 空間図形	空間における直線や平面の位置関係やなす角についての理解を深めること。また、多面体などに関する基本的な性質について理解し、それらを事象の考察に活用すること。	中学校では、第1学年で空間における直線や平面の位置関係、空間図形の構成と投影図、柱体や錐体及び球の表面積と体積を扱っている。
備考	定期テストに加え、夏休みや冬休みの宿題などの提出物も評価の対象とする。			

教科名	数 学 科	科 目 名	数 学 II	
対象学年	高校 2 年	コース・選択	コース I (必修)	
単位数	4 単位	教 科 書 (出版社)	数学 II 改訂版 (啓林館)	
使用教材	アドバンスプラス数学 II + B (啓林館)			
学習の ねらい	図形と方程式, 指数関数・対数関数, 三角関数及び微分・積分の考えについて理解させ, 基礎的な知識の習得と技能の習熟を図り, 事象を数学的に考察し表現する能力を養うとともに, それらを活用する態度を育てる。			
学 習 内 容 と 流 れ	学期・ 月等	単 元	ね ら い	留 意 点
	1 学期	第 1 章 式と証明・高次方程式 第 3 節 高次方程式	複素数の範囲での 2 次方程式、及び、3 次方程式、4 次方程式の解の導き方を理解する。	3 次方程式、4 次方程式を解くための新しい解法を習得する。
		第 2 章 図形と方程式		
		第 1 節 点と直線	座標を用いて、平面上の線分を内分する点、外分する点の位置や二点間の距離を表す。また、座標平面上の直線を方程式で表し、それを二直線の位置関係などの考察に活用する。	すべての直線が二元一次方程式で表されることについての理解を深める。
1 学期	第 2 節 円と直線	座標平面上の円を方程式で表し、それを円と直線の位置関係などの考察に活用する。	円を定点からの距離が一定である点の集合と考えて、その方程式を導く。	
	第 3 節 軌跡と領域	軌跡について理解し、簡単な場合について軌跡を求める。また、簡単な場合について、不等式の表す領域を求めたり領域を不等式で表したりする。	『ねらい』の欄にある『簡単な場合』とは、軌跡が直線や円になるような場合である。	
	第 3 章 三角関数 第 1 節 一般角の三角関数	角の概念を一般角まで拡張する意義や弧度法による角度の表し方について理解する。また、三角関数とそのグラフの特徴について理解し、三角関数の相互関係などの基本的な性質を理解する。	一般角の正弦、余弦、正接を定義する際、数学 I で定義した三角比の自然な拡張となっていることを確認させる。	
2 学期	第 2 節 三角関数の加法定理	三角関数の加法定理を理解し、それを用いて 2 倍角の公式を導く。	三角関数の合成については、グラフと関連付けて理解させることが大切である。	

	学期・ 月等	単 元	ね ら い	留 意 点
学 習 内 容 と 流 れ		第4章 指数関数と対数関数 第1節 指数と指数関数 第2節 対数と対数関数	<p>指数を正の整数から有理数へ拡張することを理解する。また、指数関数とそのグラフの特徴について理解し、それらを事象の考察に活用する。</p> <p>対数の意味とその基本的な性質について理解し、簡単な対数の計算をする。また、対数関数とそのグラフの特徴について理解し、それらを事象の考察に活用する。</p>	<p>拡張された指数の定義が、これまでの場合の自然な拡張になっていることを確認させる。</p> <p>対数の意味について丁寧に指導する。また、グラフについては指数関数のグラフを基に考えさせる。</p>
	3学期	第5章 微分と積分 第1節 微分係数と導関数 第2節 導関数と応用 第3節 積分	<p>微分係数や導関数の意味について理解し、関数の定数倍、和及び差の導関数を求める。</p> <p>導関数を用いて関数の値の増減や極大・極小を調べ、グラフの概形をかき、微分の考えを事象の考察に活用する。</p> <p>不定積分及び定積分の意味について理解し、関数の定数倍、和及び差の不定積分や定積分を求める。また、定積分を用いて直線や関数のグラフで囲まれた図形の面積を求める。</p>	<p>微分係数については、関数のグラフの接線と関連付けて扱う。</p> <p>関数の値の増加、減少については、接線の傾きなどと関連付ける。</p> <p>微分の逆の演算としての不定積分を導く。定積分については、面積を求める例などと関連付けて導入する。</p>
学習の 留意点・ 評価など	定期試験および評価については、コース内で全クラス共通とする。			

教科名	数 学 科	科 目 名	数 学 II	
対象学年	高校2年	コース・選択	コースII (必修)	
単位数	4単位	教科書 (出版社)	数学II 改訂版 (啓林館)	
使用教材	アドバンスプラス数学II +B 改訂版 (啓林館)			
学習のねらい	1年次に学習した「数学I」「数学A」を発展させ、関数とそのグラフの分析のための考え方や方法を身につけさせ、実力の養成を目標とする。			
学 習 内 容 と 流 れ	学期・ 月等	単 元	ね ら い	留 意 点
	1 学期 中間	第1章 式と証明・高次方程式 第3節 高次方程式 1 複素数 2 2次方程式 3 2次方程式の解と係数の関係 4 剰余の定理と因数定理 5 高次方程式 節末問題・章末問題	複素数を導入し、それが実数の拡張であることを理解し、複素数の四則演算をできるようにする。2次方程式が複素数の範囲でつねに解をもつこと、解が実数解になるか虚数解になるかは判別式Dの符号によって分かることを理解させる。実数係数の2次方程式の解と係数の関係を導き、これが利用できるようにする。また、解の公式を使って、2次式の因数分解ができるようにする。剰余の定理や因数定理を理解し、3次や4次の簡単な高次方程式を、因数定理やおき換えを使って解けるようにする。	2次方程式の解の公式や判別式は、実数の範囲で扱ったことがある内容であるが、定着していない生徒がいる場合は復習しながら進める。
		第2章 図形と方程式 第1節 点と直線 1 直線上の点の座標 2 平面上の点の座標 中間	中学校で学んだ数直線や座標の概念を見直し、分点の座標、2点間の距離の求め方などを確実に理解させ、その公式が使えるようにする。	分点の座標において、外分が分かりにくいので図を用いて十分に把握させる。
		3 直線の方程式 4 2直線の関係 節末問題	直線の方程式のいろいろな形を知り、2直線の平行・垂直条件や点と直線の距離の公式を学ぶ。	直線に関する点の対称性の問題を解けるようにする。
		第2節 円と直線 1 円の方程式 2 円と直線 節末問題	円の方程式、円と直線の位置関係や接線について学ぶ。	基本的な図形を扱うことを通してさらに複雑な図形について考察させる。
	1 学期 期末	第3節 軌跡と領域 1 軌跡 2 不等式の表す領域 節末問題・章末問題	条件を満たす点の軌跡を求める基本的な項目を学習する。直線や円で表された不等式の表す領域を学び、領域における最大・最小も学習する。	図をできる限り正確に書きながら問題を解く習慣をつけさせる。
		第3章 三角関数 第1節 一般角の三角関数 1 一般角 2 弧度法 3 一般角の三角関数 期末	一般角の考え方を学び、新しい角の概念(ラジアン)について学ぶ。単位円で一般角まで拡張する。	度数法から弧度法への訓練を十分に積む。三角関数のとる値の範囲について正しく理解させる。単位円を必ず書いて問題を解いてゆく習慣を付けさせる。

学期・月等	単 元	ね ら い	留 意 点	
学 習 内 容 と 流 れ	2 学期 中間	4 三角関数の相互関係 5 三角関数のグラフ 6 三角関数を含む方程式・不等式 節末問題	各象限での三角関数の値と性質について学び、相互関係を理解する。 三角関数のグラフでは、周期などについて学ぶ。三角関数を含む方程式・不等式では単位円やグラフを利用して問題演習を積む。	公式は覚えておくものであるが忘れても導出できるという数学的な自信を付けさせる。
	2 学期 期末	第 2 節 三角関数の加法定理 1 三角関数の加法定理 2 2倍角・半角の公式 3 三角関数の合成 節末問題・章末問題 中間	正弦、余弦の加法定理は公式をしっかりと覚えさせ、2倍角・半角の公式は、公式の導出をしっかりと理解させる。三角関数の合成は図を描くことを習慣づけ、加法定理の展開の逆であることを認識させる。	
	2 学期 期末	第 4 章 指数関数と対数関数 第 1 節 指数と指数関数 1 0や負の整数の指数 2 指数の拡張 3 指数関数 節末問題 期末	指数が負の値の意味を理解させ、四則演算をさせる。指数の拡張では、指数で表された数に慣れさせ、底 a が $0 < a < 1$, $1 < a$ の2つの場合のグラフの形をしっかりと把握させる。	指数計算に慣れさせる。値域が常に正であることを認識させる。
学 年 末	第 5 章 微分と積分 第 1 節 微分係数と導関数 1 平均変化率と微分係数 2 導関数 3 接線の方程式 節末問題	平均変化率は図を描いて曲線上の2点を結ぶ直線の傾きであることを理解させる。導関数の定義に従って微分させることで、公式を用いることの容易さを認識できる。 曲線上にない点からひく接線の問題を習得させる。	平均変化率と微分係数の定義式はグラフと一緒に覚えさせる。 「微分せよ」と「導関数を求めよ」など同じ意味の言葉に注意させる。	
学 年 末	第 2 節 導関数の応用 1 関数の値の変化 2 方程式・不等式への応用 節末問題	増減表を用いて極大値、極小値の値を求めてグラフを描くことにより、「実数解の個数」を求めることができ、また「不等式の証明」などもできることを認識させる。	変数 x の範囲を気を付ける。	
学 年 末	第 3 節 積分 1 不定積分 2 定積分 3 面積と定積分 節末問題・章末問題 学 年 末	「積分する」と「微分する」ことは逆演算であることや、原始関数は定数の違いだけで、無数にあることを理解させる。定積分の計算では、定積分の性質を利用して計算が容易になる方法を学習する。定積分を計算して直線や曲線で囲まれた図形の面積が求められることを理解し、その計算に習熟させる。	積分区間を逆にすると一の値になる。また、 x 軸の下側の面積もそのまま計算すると一の値になるという事を注意させる。	
学習の留意点・評価など	数Ⅱは高等学校数学の根幹であるから、小テストや演習の時間を設けて理解の徹底を図る。			
備 考				

教科名	数 学 科	科 目 名	数 学 II	
対象学年	高校2年	コース・選択	コースⅢ（必修）グレード別	
単位数	4単位	教科書 (出版社)	数学Ⅱ 改訂版（啓林館） 数学Ⅲ 改訂版（啓林館）	
使用教材	アドバンスプラス数学Ⅱ +B（啓林館） アドバンスプラス数学Ⅲ +C（啓林館）			
学習のねらい	理系の必修科目「数学Ⅱ」は、1年次に学習した「数学Ⅰ」「数学A」を発展させ、関数とそのグラフの分析のための考え方や方法を身につけ、次の必修科目「数学Ⅲ」を学ぶにあたっての基本的事項を理解すると同時に実力の養成を目標とする。			
学 習 内 容 と 流 れ	学期・月等	単 元	ね ら い	留 意 点
	4月	第1章 式と証明・高次方程式 第3節 高次方程式 1 複素数 2 2次方程式 3 2次方程式の解と係数の関係 4 剰余の定理と因数定理 5 高次方程式	2次方程式が複素数の範囲でつねに解をもつこと、解が実数解になるか虚数解になるかは判別式Dの符号によって分かることを理解させる。実数係数の2次方程式の解と係数の関係を導き、これが利用できるようにする。また、解の公式を使って、2次式の因数分解ができるようにする。剰余の定理や因数定理を理解し、2次や4次の簡単な高次方程式を、因数定理やおき換えを使って解けるようにする。	
	5月	第2章 図形と方程式 第1節 点と直線 1 直線上の点の座標 2 平面上の点の座標 3 直線の方程式 4 2直線の関係	数直線上の距離について学び、あわせて内分・外分の意味も学習する。平面上の点の座標では、2点間の距離の公式を用いることにより図形の問題を数式処理で解けるようになり、数学的道具が増える。2直線の垂直条件や点と直線の距離の公式を学ぶ。	内分・外分において、「外分の考え」が分かりにくいので図を用いて十分に把握させる。直線に関する点の対称性の問題を確実に解けるようにする。
	6月	第2節 円と直線 1 円の方程式 2 円と直線	円の方程式、円と直線の位置関係や接線について学ぶ。	
		第3節 軌跡と領域 1 軌跡 2 不等式の表す領域	条件を満たす点の軌跡を求める基本的な項目を学び、あわせてアポロニウスの円の軌跡などを学習する。直線や円で表された不等式の表す領域を学び、領域における最大・最小も学習する。	図をできる限り正確に書きながら問題を解く習慣をつけさせる。
		第3章 三角関数 第1節 一般角の三角関数 1 一般角 2 弧度法 3 一般角の三角関数 4 三角関数の相互関係 5 三角関数のグラフ 6 三角関数を含む方程式・不等式	一般角の考え方を学び、新しい角の概念（ラジアン）について学ぶ。単位円で一般角まで拡張して三角関数を新しく定義し直し、各象限での三角関数の値と性質について学び、相互関係を理解する。三角関数のグラフでは、周期や振幅および位相について学ぶ。三角関数を含む方程式・不等式は単位円やグラフを利用して問題演習を積む。	度数法から弧度法への訓練を十分に積む。 $-1 \leq \sin \theta \leq 1$, $-1 \leq \cos \theta \leq 1$ を十分に認識させて、使えるようにする。単位円を必ず書いて問題を解いてゆく習慣を付けることが重要である。

学期・月等	単 元	ね ら い	留 意 点
7月	第2節 三角関数の加法定理 1 三角関数の加法定理 2 2倍角・半角の公式 3 三角関数の合成	一番重要である正弦、余弦の加法定理はしっかり理解させ、演習を多く行う。2倍角・半角の公式は、公式の導出に重点をおき、公式を忘れても導出できるようにする。三角関数の合成は図を描いて角度などを求める習慣を付ける。 また、合成が加法定理の展開の逆であることを認識させる。	公式は覚えておくものであるが忘れても導出できるという数学的な自信を付けさせることが大事である。
9月	第4章 指数関数と対数関数 第1節 指数と指数関数 1 0や負の整数の指数 2 指数の拡張 3 指数関数	指数が負の値の意味を理解させ、四則計算をさせる。指数の拡張では、指数で表された数に慣れさせ、底 a が $0 < a < 1$, $1 < a$ の2つの場合のグラフの形をしっかり把握させる。	指数計算に慣れさせることは、後の微積分にも影響するので、十分に訓練させる。
	第2節 対数と対数関数 1 対数 2 対数関数 3 常用対数	対数関数と指数関数のグラフは、直線 $y = x$ に対称であり、真数が正であることに注意する。常用対数の計算に習熟させる。	対数方程式や不等式を解くとき「真数条件」を忘れないようにさせる。 $\log_{10}2$, $\log_{10}3$ を用いるだけで、かなりの計算ができることを認識させる。
10月	第5章 微分と積分 第1節 微分係数と導関数 1 平均変化率と微分係数 2 導関数 3 接線の方程式	平均変化率は図を描いて曲線上の2点を結ぶ直線の傾きであることを理解させる。導関数の定義に従って微分させることで、公式を用いることの容易さを認識できる。	「微分せよ」「導関数を求めよ」と同じ意味の言葉や記号が多いため、生徒は混乱しやすいので注意させる。
11月	第2節 導関数の応用 1 関数の値の増加・減少 2 方程式・不等式への応用	曲線上にない点からひく接線の問題を習得させる。増減表を用いて極大値、極小値の値を求めてグラフを描くことにより、「実数解の個数」を求めることができ、また「不等式の証明」などもできることを認識させる。	
	第3節 積分 1 不定積分 2 定積分 3 面積と定積分	「積分する」と「微分する」ことは逆演算であることや、原始関数は定数の違いだけで、無数にあることを理解させる。定積分の計算では、定積分の性質を利用して計算が容易になる方法を学習する。	
12月	数Ⅲ 第3章 数列の極限 第1節 無限数列 1 無限数列と極限 2 無限等比数列	収束、発散、振動の意味などの基本事項を理解し、極限值が求められるようにする。無限等比数列の極限についてまとめ、漸化式によって定義される数列の極限を考察し、数列の極限に関する理解を一層深めることとする。	数Ⅱで学んだ微分・積分をより深く学習することで、微分と積分は関数の変化の様子をより詳しくとらえることであることを理解させる。
1月	第2節 無限級数 1 無限級数 2 無限等比級数 3 いろいろな無限級数	無限級数の部分和とその極限值について考察し、一般の無限級数が和をもつための必要条件を押さえる。無限等比級数について収束・発散をまとめ、循環小数を分数で表すことなどの具体的な問題の解決に活用できるようにする。	

	学期・ 月等	単 元	ね ら い	留 意 点
学 習 内 容 と 流 れ	2月	第4章 関数の極限 第2節 関数の極限と連続性 1 関数の極限 2 三角関数の極限 3 関数の連続性 4 連続関数の性質	関数の極限では片側からの極限などを調べて性質についてまとめる。三角関数の極限では $\lim_{x \rightarrow 0} \sin x/x = 1$ から、様々な三角関数の極限を求めさせる。ガウス記号で表される関数から、連続であることの意味や、中間値の定理などを認識し、方程式の実数解の存在する区間を調べさせる。	
	3月	第5章 微分法 第1節 微分と導関数 1 微分可能と連続 2 微分と導関数	関数 $y= x $ を例にあげて、微分可能性の概念を理解し、微分可能性と連続性との関係を把握する。続いて導関数を定義し、二項定理によって x^n の導関数を求める。また、定義に従って和・差・積・商の導関数の公式を証明し、微分の計算の習得を目指す。	
学習の 留意点・ 評価など	数Ⅱは高等学校数学の根幹であるから、2つのレベル・2つのクラスに分けて理解の徹底を図る。			
備 考				

教科名	数 学 科	科 目 名	数 学 B	
対象学年	高校2年	コース・選択	コースⅢ（必修）グレード別	
単位数	2単位	教科書 (出版社)	数学B 改訂版（啓林館）	
使用教材	アドバンスプラス数学Ⅱ+B（啓林館）			
学習の ねらい	数学の基本的概念や原理・法則の理解を深め、事象を数学的に考察し処理する能力を深める。数学の様々な領域間の関連性を考察することの重要性に触れる。			
学 習 内 容 と 流 れ	学期・ 月等	単 元	ね ら い	留 意 点
	4月	第2章 平面上のベクトル 第1節 ベクトルとその演算 1 ベクトル 2 ベクトルの和・差・実数倍	ベクトルの概念を紹介し、ベクトルの表現・相等、および逆ベクトル、零ベクトルなどの用語について習熟させる。	演算に関していろいろな法則が成り立つことを図を利用して確認する。
	5月	3 ベクトルの成分 4 ベクトルの内積	平面上のベクトルが基本ベクトルの1次結合で表されることを示し、さらにそのときの係数を並べて、ベクトルを成分で表すことができることを理解させる。ベクトルの成分と内積との関係を考察する。	ベクトルと点の座標の関係を説明する。
	6月	第2節 ベクトルと図形 1 位置ベクトル 2 位置ベクトルと図形 3 ベクトル方程式	平面上の点の位置を表現するのに、基準となる1点を定め、その基準点を始点とするベクトルを利用すればよいことを理解させる。平面上の直線を、ベクトルを用いて表現することを学習する。	媒介変数表示を理解させる。
	7月 ～ 9月	第3章 空間座標とベクトル 第1節 空間のベクトル 1 空間における直線・平面の位置関係 2 空間の点の座標 3 空間のベクトル 4 空間のベクトルの内積 5 位置ベクトル	空間における座標を定義し、空間における原点からの距離の公式を導く。また、空間における位置ベクトルの考え方を学んで、それを用いて空間の図形をベクトルで記述する。	空間ベクトルも平面ベクトルとほぼ同様に把握できることを理解させる。

	学期・月等	単 元	ね ら い	留意点
学 習 内 容 と 流 れ	10月	第1章 数列 第1節 等差数列・等比数列 1 数列とその項 2 等差数列 3 等比数列	等差数列についての初項、公差、一般項の関係を中心に考察をすすめ、等差数列の理解を深めるようにする。等比数列について、初項と公比が与えられている等比数列の一般項 an が n の式で表すことができることを理解させる。	具体的な例から始めて理解させる。
	11月	第2節 いろいろな数列 1 和の記号 Σ 2 累乗の和	和を表す記号 Σ の意味と用法を十分理解させる。	Σ は生徒にとって抵抗感が強く数学離れの要因になるので注意する。
		3 階差数列 4 数列の和と一般項 5 いろいろな数列の和	階差数列や群数列などの、やや複雑な数列について、考え方や解法を習得させる。	解法の暗記でなく、その根拠まで理解させるようにする。
	12月	第3節 漸化式と数学的帰納法 1 漸化式	数列の定義の仕方の1つとして、帰納的定義を理解させ、簡単な漸化式が扱えるようにする。	漸化式の意味を理解させ、線形二項間漸化式の解法を確実に習得させる。
	1月	2 数学的帰納法	数学的帰納法という有用な証明方法を理解させ、それを等式・不等式の証明や漸化式などに応用させる。	具体的な例から数学的帰納法の考え方を紹介する。
	2月 ～ 3月	<数学Ⅲ> 第4章 関数の極限 1 分数関数 2 無理関数 3 合成関数 4 逆関数	関数概念の理解を一層深め、いろいろな関数について、その関数値の極限を求める。また、関数の性質を考える上で重要になる関数の連続性を関連して扱い、それらを事象の考察に活用できるようにする	
学習の留意点・評価など	数列は、数学Ⅲを学習する前の重要な概念であるため、多くの練習を積み、理解を深める必要がある。ベクトルは、図形をこれまでとは違った捉え方で考察していく。その必要性和応用性を認識し、積極的に活用することを目指す。			
備 考	「数学Ⅱ」同様、2つのレベル、2つのクラスにわけ、理解の徹底をはかる。受験にも対応できるように、多くの問題を経験させる。			

教科名	数 学 科	科 目 名	数 学 B	
対象学年	高校2年	コース・選択	コースⅡ 2選3	
単位数	2単位	教科書 (出版社)	数学B (改訂版) (啓林館)	
使用教材	アドバンスプラス数学Ⅱ + B (啓林館)			
学習の ねらい	数列又はベクトルについて理解させ、基礎的な知識の習得と技能の習熟を図り、事象を数学的に考察し表現する能力を伸ばすとともに、それらを活用する態度を育てる。			
学 習 内 容 と 流 れ	学期・ 月等	単 元	ね ら い	留 意 点
	4月	第2章 平面上のベクトル		
	5月	1. ベクトルとその演算	ベクトルの意味, 相等, 和, 差, 実数倍, ベクトルの成分表示及び, ベクトルの内積について理解すること。	ベクトルの演算について, 数の演算と類似の法則が成り立つことを理解させる。
	6月	2. ベクトルと図形	位置ベクトルについて理解し, 内積や位置ベクトルを平面図形の性質などの考察に活用すること。	平面図形の性質の証明に内積を活用できるようにすることに重点を置く。
		第3章 空間座標とベクトル		
	7月 9月	1. 空間のベクトル	座標及びベクトルの考えが平面から空間に拡張できることを知る。	数学Ⅰで, 三角比による空間図形の計量を扱っている。さらに, 数学Aで, 空間における直線や平面の位置関係, 多面体について扱っている。
		第1章 数列		
	10月	1. 等差数列・等比数列	等差数列と等比数列について理解し, それらの一般項及び和を求めること。	数列における n と第 n 項との対応関係に着目し, 数列の一般項の意味を理解させる。
	11月 12月	2. いろいろな数列	いろいろな数列の一般項や和について, その求め方を理解し, 事象の考察に活用すること。	Σ の扱いは, 生徒にとって理解しにくいものである。丁寧に指導することが大切である。
1月 2月	3. 漸化式と数学的帰納法	漸化式について理解し, 簡単な漸化式で表された数列の一般項を求めること。数学的帰納法について理解し, それを用いて簡単な命題を証明すること。	漸化式の単元では, 一次の形の隣接二項間の漸化式を扱う。数学的帰納法の単元では, 簡単な命題を取り上げて数学的帰納法を用いて証明させ, その方法の意味を理解させることに重点を置く。	
備考				

教科名	数 学 科		科 目 名	数 学 B
対象学年	高校3年		コース・選択	コース I
単位数	2 単位		教 科 書 (出版社)	数学 B (啓林館)
使用教材	アドバンスプラス数学Ⅱ + B (啓林館)			
学習の ねらい	数列またはベクトルについて理解させ、基礎的な知識の習得と技能の習熟を図る。			
学 習 内 容 と 流 れ	学期・ 月等	単 元	ね ら い	留 意 点
	1 学期 中間	第 1 章 数列		
		1. 等差数列・等比数列	等差数列と等比数列について理解し、それらの一般項及び和を求めること。	公式を丸暗記せず、導くことができるように指導する。
		2. いろいろな数列	いろいろな数列の一般項や和について、その求め方を理解し、それらの一般項及び和を求めること。	計算が不得意な生徒にとってはつまづきやすい単元である。
	1 学期 期末	3. 漸化式と数学的帰納法	漸化式について理解し、簡単な漸化式で表された数列について、一般項を求めること。 数学的帰納法について理解し、それをを用いて簡単な命題を証明すること。	漸化式の形によって、一般項の導き方が異なることを理解させる。
	2 学期 中間	第 2 章 平面上のベクトル		
		1. ベクトルとその演算	ベクトルの意味、相等、和、差、実数倍、位置ベクトル及びベクトルの成分表示について理解すること。	ベクトルの和、差、実数倍は、整式の展開の方法と関連付けて指導する。
		2. ベクトルと図形	ベクトルの内積及びその基本的な性質について理解し、それらを平面図形の性質などの考察に活用すること。	既習事項である三角比の求め方を復習するとよい。
	2 学期 期末	第 3 章 空間座標とベクトル		
		1. 空間のベクトル	座標及びベクトルの考えが平面から空間に拡張できることを知る。	平面上のベクトルと関連付けて指導する。
学年末				
学習の 留意点・ 評価など	<ul style="list-style-type: none"> ・定期試験に加え、学力確認テスト、小テストなどを評価に加味する。 ・学習意欲、態度および提出物を評価に加味する。 			

教科名	数 学 科		科 目 名	数 学 Ⅲ
対象学年	高校3年		コース・選択	コースⅢ（必修）グレード別
単位数	4単位		教科書 (出版社)	数学Ⅲ（啓林館）
使用教材	アドバンスプラス数学Ⅲ（啓林館）			
学習の ねらい	数学Ⅱに続く微積分法の発展的内容を身につけさせる。ここまでで得られた数学の力が生徒それぞれの進路において、また、進学(入試)、就業、さらには生涯を通じての様々な場面において、貢献できるようにする。			
学 習 内 容 と 流 れ	学期・ 月等	単 元	ね ら い	留意点
	1 学期 中間	5章 微分法 3節 導関数の応用 1 接線の方程式	数Ⅱの接線の方程式について復習し、高校数学で扱うすべての微分可能な関数の接線を求められるようにする。	
		2 平均値の定理 研究 平均値の定理の不等式への応用 3 関数の増減	数Ⅱの微積分では取り扱わなかったものとして、「平均値の定理」を指導する。	平均値の定理は理解しづらいところなので、十分時間をとって、その基本から使い方まで習熟させる。
		4節 いろいろな応用 1 グラフの凹凸 2 第2次導関数と極大・極小 3 速度と加速度 4 関数の近似値 発展 ロピタルの定理	いずれも数Ⅱの微積分では取り扱われなかったところである。概念から適用方法までしっかりと理解させる。	
		6章 積分法 1節 不定積分 1 不定積分 2 置換積分法と部分積分法	不定積分を求める方法を習得させる。	
		2節 定積分 1 定積分 2 定積分と微分 3 区分求積法と定積分 研究	定積分を求める方法を習得させる。	不定積分は関数であるが、定積分は、閉区間で被積分関数と、上端、下端の数から定まる数であることをはっきり理解させる。

学期・月等	単 元	ね ら い	留意点
学 習 内 容 と 流 れ	1 学期 期末 3 節 面積 1 面積 4 節 体積 1 体積 2 回転体の体積 研究 球の表面積 5 節 曲線の長さ 1 曲線の長さ 発展 微分方程式	面積や体積が定積分によって求められることを理解させ、その計算ができるようにする。また、応用として、曲線の長さが求められるようにする。	
	2 学期 中間 問題演習（数学Ⅰ AⅡ BⅢ）	数Ⅲが必要な生徒には数Ⅲの演習を行い、数Ⅲが不要な生徒には、Ⅰ AⅡ Bの復習演習を行う。	いずれのクラスにおいても、問題演習を通して、既習事項がしっかりと身に付けられるように留意する。
	2 学期 期末 同上	同上	同上
学習の留意点・評価など	定期試験のほか、毎週早朝行われる確認テストや、休み明けの課題テストなども評価に入れる。		
備 考	2学期からは数学Ⅲが必要な人とそうでない人にクラスを再編成し、必要な生徒には演習、必要でない生徒にはⅠ AⅡ Bの復習を行う。		

教科名	数 学 科	科 目 名	数学Ⅲ演習	
対象学年	高校3年	コース・選択	コースⅢ（必修）グレード別	
単位数	2単位	教科書 (出版社)	数学Ⅲ（啓林館）	
使用教材	①教科書 ②アドバンス・プラス数学Ⅲ（啓林館） ③2018 30分プレテスト 数学ⅠA+ⅡB（数研出版）			
学習の ねらい	平面上の曲線や複素数平面についての理解を深め、知識・技能の習得を図り、事象を数学的に考察し表現する能力を伸ばすとともに、それらを積極的に活用する態度を育てる。			
学 習 内 容 と 流 れ	学 期 ・ 月 等	単 元	ね ら い	留 意 点
	4月	第1章 平面上の曲線 第2節 媒介変数と極座標 1 曲線の媒介変数表示 2 極座標と極方程式 3 いろいろな曲線	曲線の全体やその一部分が1つの変数で表すことができることを理解し、2次曲線や、より一般の曲線の媒介変数表示へとその考えを発展させる。また、媒介変数表示によると、サイクロイドのようにx座標とy座標の直接の関係を導くのが困難な曲線についても式として表すことができることを理解する。極座標の意味、直交座標との関係を理解する。離心率を用いて、2次曲線を統一した形の極方程式を導く。まとめとして、様々な曲線が、媒介変数や極方程式を用いて表されることを学ぶ。	
	5月 6月	第2章 複素数平面 第1節 複素数平面 1 複素数平面 2 複素数の極形式 3 ド・モアブルの定理	数学Ⅱにおいて方程式の解として導入された複素数を、座標平面上の点に対応させることで平面上の点として表し、複素数の四則演算の図形的な意味を考える。ベクトルを利用して、複素数の和・差および実数倍を図示し、複素数の極形式による表現から、複素数の積・商の図形的意味を示して、ド・モアブルの定理を導く。	
	7月	第2節 平面図形と複素数 1 平面図形と複素数	平面図形を複素数の集合とみなして、複素数の平面図形の問題への応用を図る。2点間の距離と絶対値、内・外分点の複素数、点zのまわりの回転移動、2直線のなす角の複素数による表現、3点の共線条件、2直線の垂直条件、複素数の等式が表す図形などについて学び、幾何学的な関係が、どのように複素数の代数的な演算と結びつかを考察して複素数を総合的に理解する。	

	学期・ 月等	単 元	ね ら い	留意点
学 習 内 容 と 流 れ	9月	演習	(数学Ⅰ・Ⅱ・A・B)	
	10月	演習	(数学Ⅰ・Ⅱ・A・B)	
	11月	演習	(数学Ⅰ・Ⅱ・A・B)	
	12月	演習	(数学Ⅰ・Ⅱ・A・B)	
学習の 留意点・ 評価など	定期テストにおいては、知識・理解に偏ることなく、数学的な考え方、数学的な技能をみるための問題も出題する。			
備 考	1学期は数学Ⅲの内容についての理解を深め、2学期以降は数学Ⅰ・Ⅱ・A・Bも含め、高校数学全体についてのまとめの演習を行う。 自分の進路実現のために必要な基礎学力養成の時間にも充てる。			

教科名	数 学 科	科 目 名	数学活用 (A4)	
対象学年	高校3年	コース・選択	選択 (コース I)	
単位数	2 単位	教 科 書 (出版社)	数学活用 (実教出版)	
使用教材	アドバンス数学 I + A (啓林館) アドバンスプラス数学 II + B (啓林館)			
学習の ねらい	数学と人間とのかかわりや数学の社会的有用性についての認識を深めるとともに、事象を数理的に考察する能力を養い、数学を積極的に活用する態度を育てる。			
学 習 内 容 と 流 れ	学期・ 月等	単 元	ね ら い	留意点
	1 学期	1 章 身の回りの数学 1 節 いろいろな場合の数 2 節 身の回りの図形 3 節 数学的な表現のくふう	身近な事象を数理的に考察するとともに、それらの活動を通して数学の有用性についての認識を深める。	
	2 学期	2 章 社会生活と数学 1 節 経済と数学 2 節 測定と数学 3 節 コンピュータと人間の活動	社会生活において数学が活用されている場面や身近な事象を数理的に考察するとともに、数学と文化とのかかわりについての認識を深める。	
	3 学期	3 章 数学の発展と人間の活動 1 節 数と人間 2 節 図形と人間 3 節 数学と文化	数学が人間の活動にかかわってつくられ発展してきたことやその方法を理解するとともに、それらの活動を通して数学の社会的有用性についての認識を深める。	
学習の 留意点・ 評価など	定期試験 (期末試験と学年末試験) に加えて小テストを行い、評価に加える。			

教科名	数 学 科	科 目 名	数学センター演習	
対象学年	高校3年	コース・選択	コースⅡ (B4)	
単位数	3単位	教科書 (出版社)	—	
使用教材	①ニュースタンダード数学演習Ⅰ・A+Ⅱ・B (数研出版) ②2018 30分プレテスト数学ⅠA+ⅡB (数研出版)			
学習の ねらい	数学Ⅰ、数学A、数学Ⅱ、数学Bの内容を中心に学力の基礎固めをし、大学入試センター試験に対応できるような問題演習を行う。			
学 習 内 容 と 流 れ	学期・ 月等	単 元	ね ら い	留 意 点
	4月	} 数学ⅠA+ⅡB	大学入試センター試験の受験に対して、能率的かつ万全な備えができるようにする。	
	5月			
	6月			
	7月			
	9月			
	10月			
	11月	総まとめ		
	12月	総まとめ		
	1月	総まとめ		
2月	総まとめ			
学習の 留意点・ 評価など	マークシート方式の穴埋めに対応できるように TRIAL を中心に進め、その解き方を身につける。			
備 考				